

龍谷大学 社会学部

2020 年度  
社会共生実習  
活動報告書

You,  
Unlimited



龍谷大学  
RYUKOKU UNIVERSITY

## 目次

ごあいさつ.....	3
<b>地域エンパワねっと.....</b>	<b>4</b>
(1) 取り組みの趣旨・目的.....	4
(2) 2020年度の取り組みの紹介.....	4
(3) 2020年度の取り組みの成果と課題.....	7
<b>雑創の森プレイスクールプレイワーカー.....</b>	<b>8</b>
(1) 取り組みの趣旨・目的.....	8
(2) 2020年度の取り組みの紹介.....	8
(3) 2020年度の取り組みの成果と課題.....	9
<b>大学は社会共生に何ができるのかー文化財から“マネー”を創出するー.....</b>	<b>11</b>
(1) 取り組みの趣旨・目的.....	11
(2) 2020年度の取り組みの紹介.....	11
(3) 2020年度の取り組みの成果と課題.....	15
<b>伏見の食材を活かした特産品づくりと地域連携.....</b>	<b>17</b>
(1) 取り組みの趣旨・目的.....	17
(2) 2020年度の取り組みの紹介.....	17
(3) 2020年度の取り組みの成果と課題.....	19
<b>いくつになっても、出かけられる！～高齢者を元気にする介護ツアー企画～.....</b>	<b>21</b>
(1) 取り組みの趣旨・目的.....	21
(2) 2020年度の取り組みの紹介.....	21
(3) 2020年度の取り組みの成果と課題.....	24
<b>多文化共生のコミュニティ・デザイン～定住外国人にとって住みやすい日本になるには？～.....</b>	<b>26</b>
(1) 取り組みの趣旨・目的.....	26
(2) 2020年度の取り組みの紹介.....	27
(3) 2020年度の取り組みの成果と課題.....	29
<b>発信情報.....</b>	<b>30</b>

# ごあいさつ

2020年度 社会共生実習運営委員会  
運営委員長 砂脇 恵

社会学部のカリキュラム改革にともない2017年度からスタートした「社会共生実習」は、2020年度に4年目を迎えました。今年度は、新型コロナウイルス感染予防のため、前期はオンライン授業の全面実施となり、地域での実習活動ができない状況からの船出となりました。授業計画の大きな変更を余儀なくされるなか、各プロジェクトの担当教員と受講生は、オンラインでできることを模索しながら、現場活動の再開に向けた準備に取り組みました。後期から学外実習活動の制限が緩和され、学生たちは待ちに待ったフィールドワークに取り組むことができました。地域の住民や関係団体のみなさまのご協力のおかげをもちまして、地域課題を見いだし、解決に向けた実践活動に取り組むことができました。感染防止対策に配慮しながらの実習への受け入れにご理解とご協力いただきましたすべてのみなさまに厚くお礼申し上げます。

今年度の「社会共生実習」は、①「地域エンパワねっと（瀬田東学区）」、②「地域エンパワねっと（中央地区）」、③「雑創の森プレイスクールプレイワーカー」、④「大学は社会共生に何ができるのかー文化財から“マネー”を創出するー」、⑤「伏見の食材を活かした特産品づくりと地域連携」、⑥「いくつになっても、出かけられる！～高齢者を元気にする介護ツアー企画～」、⑦「多文化共生のコミュニティ・デザイン～定住外国人にとって住みやすい日本になるには？～」というバラエティにとんだプロジェクトが出揃いました。

本報告書では、各プロジェクトの1年間の活動とその成果を報告しております。ご高覧いただき、現代社会が抱える課題と解決に向けた展望をみなさまと共有できましたら幸いです。

2021年3月

# 地域エンパワねっと

担当教員：脇田健一、築地達郎

## (1) 取り組みの趣旨・目的

「地域エンパワねっと」（愛称は「大津エンパワねっと」）は2007年度、本学部が立地する大津における「地域活性化」、本学部に学ぶ「学生の学びの質的向上」、そして社会学部における「教学改革」——の3つを目的として始まったものである。同年度、文部科学省の「現代GP」に採択され、学部所属の全学科（当時は4学科）の共同プログラムとして発足した。学生と地域住民が直接出会い、地域運営のための活動に向けて協力し合うことを通じて、相互にエンパワメント（潜在化した力を引き出すこと）され学び合う関係を創出することを目指した。また、教員が学科の壁を越えて、教育上のコラボレーションをおこなう実験でもあった。本プログラムが起点となり、2016年度カリキュラム改革において、多くの講義系科目の相互乗り入れと「社会共生実習」の実現につながった。

本プロジェクトの最大の特徴は、学生が取り組むべき課題を学生自身が地域社会のなかから発見し（課題発見）、学生が地域住民の皆さんとともに実際の課題解決のための実践に取り組む（課題解決）という点にある。ただし、このような「課題発見×課題解決」に取り組むことは、学生にとっては極めて難易度が高いといわざるを得ない。そのため本プロジェクトでは、担当教員と地域住民のリーダー層（地元自治連合会役員等）とが定期的に（原則毎月1回）会合（「大津エンパワねっとを進める会」）を開き、地域の動きや学生の動きを常に共有し、そのような情報共有に基づき学生たちの指導がおこなわれてきた。

学生にはまた、地域活動の成果をわかりやすくまとめて地域住民にフィードバックする「報告会」への参加と口頭報告および文書での報告が求められる。報告会は前期と後期の終盤に各1回設定されており、学生は地域住民の前でプレゼンテーションをおこなう。地域活動を終えた学生は、学科ごとに指定された関連科目を単位修得することによって「龍谷大学まちづくりコーディネーター」の認定を受けることができる。

## (2) 2020年度の取り組みの紹介

2020年度は、3回生2名、2回生8名の計10名が13期生として履修した。3回生のうち1名は2019年度からの継続である。2016年度のカリキュラム改革によって制度上は複数年度の履修が可能となっていたが、継続履修第1号となった。前年度の履修生が3名にとどまったのに比較すれば、履修生は大幅増だったといえる。ただ、2つの地域に分か

れて多面的に地域活性化活動に関わって行くには引き続き過小な人数にとどまった。

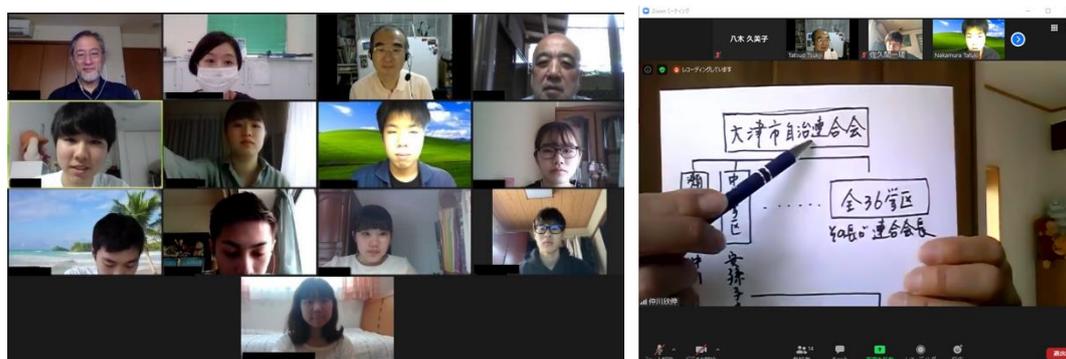
今年度は、「コロナ禍の中のエンパワねっと」として記憶されることとなった。

龍谷大学は4月第1週に、前期の授業を全面的にオンライン化（非対面実施）することを決めた。これを受けて、エンパワねっとの授業もすべてインターネットで行うことになった。地域の皆さんと出会うことはおろか、学生同士、学生―教員も、前期中は一度も会うことができなかった。これは、学生自身による「課題発見」を重視する地域連携型教育プログラムであるエンパワねっとにとって、致命的な状況であった。

例年であれば、4月に簡単なオリエンテーションを行ったうえで、5月の大型連休前後には「地域デビュー」を行って、自治活動や地域福祉活動に関わる諸団体の皆さんとの出会いの場をつくってきたが、今年度はこれら諸団体の定例会合すら実施できないという状況下、まったく身動きがとれない状態とならざるを得なくなった。前項で説明した「大津エンパワねっとを進める会」も、年度内は未組織のままとなった。

このため前期中は、日本における地域社会の歴史や住民自治の基礎理論、また、大津・中央地区、瀬田東学区の歴史やまちの成り立ちなどについて、オンライン講義形式で学ぶ時間を多くとることになった。

地域デビューの代替措置として、プログラムの運営に長くお力添えいただいている瀬田東学区の仲川欣伸自治連合会会長（6月5日）と、中央学区の安孫子邦夫自治連合会会長（6月12日）のお二方に、オンライン（Zoom）でご出講いただくことができた。それぞれの地域において現に直面している課題について、じっくりと話していただいた。慣れないWeb会議システムにチャレンジしていただいたお二人に心より感謝申し上げたい。（写真はオンライン授業の様子）



現場に出られない、人との出会いがない状況での学習には当然ながら大きな限界があった。しかしその一方で、エンパワねっとの理念に通じる思想や知識を時間をかけて学ぶことができたこと、それを踏まえ、お二人の自治連合会会長から生の声をじっくりと伺うことができたことは、学生にとって大きな収穫であったと思われる。

新型コロナウイルスの感染蔓延第1波が終わり、社会学部としての実習ガイドラインが制定されたことを受け、7月に感染防止対策をとったうえで両地区での「まちあるき」を

実施した。まず、7月10日に瀬田東学区で、同17日に中央地区で、それぞれ2時間程度かけて地域の地形や町の成り立ち、人の流れなどについて現場学習することができた。

前期の報告会は中止した。

後期に入ってから、全学的に感染防止対策が緩和され、実習授業は原則として対面で開講されることになった。一方、学外での実習活動は前期と同じレベルのガイドラインが適用され、地域住民の皆さんなどに出会う場を設定するためには、数週間前から計画的に準備することが求められた。引き続き、足かせをつけられたような状態での履修展開となった。

後期に入ると同時に、10名の学生を5名ずつ2チームに分け、それぞれ中央、瀬田東の各地区を担当することとした。

例年は、前期中に「課題」を発見し、夏休み中に「解決」のための方策を企画し、後期にはいってその方策を実施する――という流れで活動を行うのが通例であったが、今年度は「解決」のための地域活動、とくに地域住民の皆さんと協働する活動はほとんど実行できなかった。

このため、後期は「解決」のための方策を検討し、企画を立案して問題提起する活動にとどまらざるを得なかった。指導に当たっては、次年度に向けて複数年度履修することを意識させることに重点を置いた。

しかし、その分、例年に比較して、地域の課題をより俯瞰的・総合的に解釈して中長期的な改善につながるような企画にむすびつけようという努力に時間を費やすこともできた。

こうした成果の中間報告と共有を目的として、1月16日（土）、地域住民の皆さんもご参加いただいて、オンラインで活動報告会を行った。両チームからの発表は10分程度に抑え、両チームの活動内容や今後の方向性などについて参加者全員でディスカッションするための時間を多くとった。

地域からの参加者からは、地元がそれぞれ直面する問題をよく理解して、学生ならではの活動を構想したとの評価をいただいた。

受講生からは、「ここまで深く、地域課題に踏み込んだ経験ができたことはとてもよかった」、「チームメンバーとともに活動をつくりあげていくという経験ができてよかった」、「今まで大学生活でできていなかった自ら考えて行動することができてよかった」などといった声を聞くことができた。

### (3) 2020年度の取り組みの成果と課題

#### ①[中央地区]

中央地区（大津市中央学区をはじめとする中心市街地）では、大津市が管理しているワーキングスペース『まち家オフィス結』（以下、まち家オフィス）や『中央市民センター』で住民や行政担当者のお話を聞く中で、「コロナ禍で失われた地域の人たちのつながり」の創出が喫緊の課題として浮かび上がった。

学生チームは、この課題に対する解決方策として2つのイベントを企画した。

1つ目は「スカイランタン」イベントである。子どもたちに何か良い思い出を残したいという地域の方々の思いをもとに企画し、3月下旬に実施した。

2つ目は「図書館プロジェクト」。『まち家オフィス結』を、地元の方に気軽に利用してもらえよう、オフィス内に本棚を設置し、地域の方々に本や漫画などを持ち寄ってもらい自由に読んでもらおうという企画である。

#### ②[瀬田東学区]

瀬田東学区では、学区の社会福祉協議会に参加している各種団体の「担い手不足」問題がクローズアップされた。地域の交通安全や文化活動を担う団体など、多くの団体のリーダー層が高齢化するとともに次の世代のリーダーが見つからないという状況に追い込まれている。学生たちは、後期に入って傍聴が許された地元の「三役会議」（学区自治連および学区社協の合同役員会）において、この問題の存在を強く意識することとなった。

担い手不足問題は、超高齢化に直面する日本の地域自治活動が抱える共通の課題であり、その解決に向けたさまざまな方策が提案され、試行錯誤が重ねられている。瀬田東学区においては、「まちづくり協議会方式」や「コミュニティセンター方式」などが検討の俎上に上がりつつある。

他方で、当事者である各種団体リーダー層や自治会長層が直面するよりミクロな課題や、それぞれの将来の事業継続方策についての情報共有が必ずしも十分に行われていないこともわかってきた。

そこで瀬田東学生チームは、「担い手不足」という地域の悩みのより具体的な実像を可視化することを後期の活動の中核とすることにした。

具体的には、学生が手分けをして、担い手不足に直面するいくつかの団体のリーダーに電話インタビューを行った。また、先駆的な取り組みを行っている他学区の事例に関するヒアリング調査を行った。これらの調査を基に、次年度にはさらに綿密な調査活動を展開するという方針を打ち出した。

# 雑創の森プレイスクールプレイワーカー

担当教員：久保和之

## (1) 取り組みの趣旨・目的

子どもたちをめぐるさまざまな問題は、もはや教育や心理的なアプローチだけではなく、社会全体の構造的な問題として考えなければならない現状があり、子どもたちの自発的活動の組織化や社会参画活動あるいは自然体験活動を支援しつつ、地域社会における子どもたちの居場所を築く力をもった「プレイワーカー」が必要とされている。近年、全国的に「冒険遊び場」と呼ばれるプレイパークが増えており、そこで活動するプレイリーダーの育成が急務の問題とされている。

本プロジェクトでは財団法人プレイスクール協会が運営する「雑創の森プレイスクール」において、子どもの自発的活動や支援をする「プレイワーカー」として実習をおこなう。プレイスクールに赴き、スクールスタッフのアシスタントとして子どもに対するプログラムを実施していく。実習を通じて、子どもの活動を支援する技術や知識を身につけ、多様な現場で対応できる人材育成を目指すことを目的とする。

## (2) 2020年度取り組みの紹介

前期はコロナ対応により、オンラインでの取り組みをおこなった。まずは、実習先のプレイスクールで発行している「プレイスクールゆうびん（遊便）」のPDF資料を読んでもらい、プレイスクールの大まかなイメージを掴んでもらった。実習としては「アヤシイケイジバンの内容」（風邪をひいたときにははいけないこと）を考えてもらった。続いて、オンデマンドの教材を用意して「プレイスクール」について説明をし、植物の笛や工作などの動画を見て、活動内容の理解に努めた。また、「イメージカード」という、指定した図形を用いて作図をするという課題にも取り組んだ。続いて「イメージテイル」作成に取り組み、「女の子」「猟師さん」「オオカミ」がでてくる物語を考えた。それらの課題を基に「遊びとイメージネーション」について、「感覚的創造」と「文脈的創造」などのキーワードから分析をおこなった。

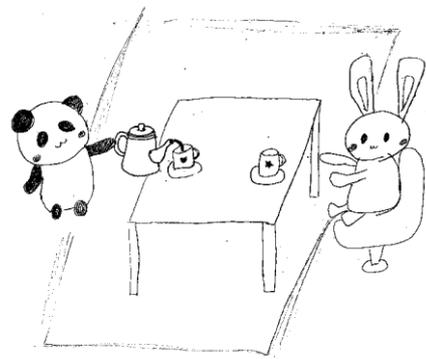
夏休みに入ると、プレイスクールの活動が再開されていたので、実際に現地に足を運びプレイリーダーとしての活動をはじめた。まず、プレイスクールの概要を改めて学び、施設やフィールドを視察した。また、実際に竹の水鉄砲や木のペーパーナイフを試作して糸のこぎりやナイフなどの工具の取り扱いや指導上の注意点を学んだ。

後期からは毎週土曜日に活動している「冒険クラブ」と「発明クラブ」に参加し、プログラム運営に関わり、備品や用具の準備から実施補助をした。コロナの関係により例年行っているお泊り会が中止になったので、日帰りの活動のみになったが、飯盒炊爨やナイトプログラムの運営も体験することができた。

### (3) 2020年度の取り組みの成果と課題

前期はコロナ禍によってオンラインのリモート講義になり、例年よりもしっかりと座学の時間を確保することができた。動画を利用することによって視覚で理解できるので、活動のイメージが伝わったと思われる。ただ、実際に子どもの活動をサポートしていく点においては、直接の関りを通して関係性やスキルが身についていくので、実習に行く期間が短くなったことは残念である。感染症予防の観点から、仕方ないことではあるが、台風などの災害時も含め、実習期間が短くなった際のスケジュールをどのようにしていくかは、改めて考えていかなければいけない課題である。今年度は、後期からの現地活動になったので、学生個人の担当クラスを固定せずに、全員が「冒険クラブ」二つと「発明クラブ」の活動に参加することができた。活動内容や対象年齢によって注意する点や考慮すべき点が異なるので、より多くの学びにつながったことと思われる。

#### ▼イメージカード



▼発明クラブでの説明中



▼糸のこぎりサポート



▼作った車を走らせる



▼虚空蔵谷での水遊び



▼実習の振り返り記録記入中



# 大学は社会共生に何ができるのか

## —文化財から“マネー”を創出する—

担当教員：高田満彦・猪瀬優里

### (1) 取り組みの趣旨・目的

文化財の有効活用、特に観光における活用促進の機運が近年高まり、2019年4月には文化財保護法が改正・施行された。滋賀県は日本遺産や文化財等有形無形の文化財を京都、奈良に次いで数多く有しながら、これらの地域に匹敵する経済効果を生み出していない。殊に大津は国際観光都市京都に隣接する位置にありながら観光業等において経済効果が低い。何が課題で、それをどのように解決すればよいのか。本プロジェクトでは次の目的をもって開講している。

- ① 大津が持てる文化財というリソースの強みを観光資源として生かしながら、マネーを創出する方策を考える。
- ② 行政からの政策待ちではなく、民間企業やNPOと連携しながら、これらを貴重なリソースとして生かす方法、各組織の連携の在り方等を模索する。
- ③ 取り組みの先進地や当該の地域・大津を大学生の柔軟な発想を生かして実際に歩き、体験を通して問題の解決に取り組む。

### (2) 2020年度の取り組みの紹介

今年度前期はコロナ禍により全科目オンライン開講という未曾有の事態になり、実習系科目「社会共生実習」の本プロジェクトも到達目標の実現性、実施方法等を熟慮の上開講に至った。

本プロジェクトの主たる学修活動はフィールドワーク（以下FW）である。このためオンライン開講という現状から、まず専門家による講義とディスカッションで学修へのモチベーションを維持し、学外実習が解禁される日を待ちながら行程表や予算書の作成作業を続けた。ひとつの試みとしてバーチャルでのFWも行った。7月には待望の学外実習／FWが実現することとなり、以後、感染症に細心の注意を払いながらFWと専門家による講義を交互に続けた。結果として当初計画とほぼ同じ年間7回のFW、専門家による8回の講義が実現した。さらにこれらに加え、夏と冬に計2回のプロジェクト独自のワークショップや発表会、愛媛大学との研究交流が実現した。コロナ禍にありながら蓋を開けてみれば結局通

常の年よりも充実した取り組みが行えた。これも本プロジェクト所属の学生たちの高い意欲と実行力が原動力になったのではないかと思われる。今年度の取り組みは以下に示す通り。

■フィールドワークを行った文化財や観光地

回	月/日 (曜)	フィールドワーク実施地 お世話になった方々 (敬称略)	主な活動内容
第1回	5/10(日)+7/19(日)	大津市内・延暦寺・日吉大社 西教寺・坂本里坊	フィールド調査
第2回	5/21(木)→10/18(日)	大津市内・大津宮跡・ 近江神宮 (マルシェ) 大津市歴史博物館バーチャルツアー は5/21 (木) に実施	フィールド調査・講話
第3回	6/14(日)→10/11(日)	長浜市内	フィールド調査
第4回	7/19 (日)	京都市内・東山エリア	フィールド調査・講話
第5回	11/14.15 (土・日)	大津市内・大津百町周辺 大津市歴史博物館学芸員 木津 勝 大津市内民泊オーナー 坂 啓智	フィールド調査・講話
第6回	12/6 (日)	近江八幡市内	フィールド調査
第7回	冬期休業中	履修生各自の Option	フィールド調査・ インタビュー



◀【聞き取り調査—大津中町商店街の老舗—】

## ■ ご講話頂いた方々

回	月/日	講話していただいた方々（敬称略）	講話の題目
第1回	4/24 金	NPO 法人 歴史資源開発機構 主任研究員 大沼 芳幸	「歴史遺産観光の実際と課題 －文化を財とするためには－」
第2回	5/21 木	大津市歴史博物館 学芸員 木津 勝	「『文化財からマネーを創出する』という 観点から見た博物館の意義と活用法」
第3回	6/19 金	嵯峨美術大学デザイン学科観光デザイン領域 教授 小畑 博正	「地域における観光資源の高度な活用と 創出プロセス」
第4回	6/26 金	大津市産業観光部観光振興課 主査 松本 久孝	「大津市の観光戦略と文化財を活用した 誘客の在り方」
第5回	7/10 金	長浜商店街連盟 会長 沢田 昌宏 長浜観光協会 企画・PR担当マネージャー 梅園 いつ子	「長浜市の町をあげた取り組み －黒壁前夜から－」 「長浜市の観光戦略」
第6回	10/9 金	京都新聞 論説委員 十倉 良一	「地域から観光を考える」
第7回	11/1 金	大津中央学区自治連合会 会長 安孫子 邦夫 大津の町家を考える会 雨森 鼎	「地域の方と語る」
第8回	2/16 火	近江八幡市文化観光課 文化財保護グループ 才本 佳孝 近江八幡観光物産協会 主任 林 昌代	「近江八幡市の文化財活用の現状と 方向性について－近江八幡市文化財 保存活用地域計画の作成から－」 「近江八幡観光物産協会の取り組み」



◀【地域の方のお話を聞く】

■ご参加頂いた方々と団体等

回	月/日	ご参加頂いた方々（敬称略）	テーマと内容等
第1回	5/21 木	公益財団法人びわ湖大津観光協会 参事 田中 真一	「大津の文化財と 観光戦略について」
第2回	8/26 水	大津市歴史博物館 学芸員 木津 勝 嵯峨美術大学芸術学部 教授 小畑 博正 大津市産業観光部観光振興課 主査 松本 久孝 近江八幡観光物産協会 主任 林 昌代	「中間発表会／ワークショップ」
第3回	12/4 金	愛媛大学社会共創学部文化資源マネジメントコース 准教授 榎林 啓介 榎林ゼミ学生の皆さん *（）の数字は回生 竹中吉備（3）、河野哲平（3）、古屋裕香利（2） 本宮美波（2）	「愛媛大学との研究交流」
第4回	2/25 木	大津市歴史博物館 学芸員 木津 勝 大津の町家を考える会 雨森 鼎 一會話堂セミナーハウス 代表 高橋美郷 園城寺事務所 書記・事務長 角 克也 愛媛大学社会共創学部文化資源マネジメントコース 榎林ゼミ学生の皆さん *（）の数字は回生 竹中吉備（3）、河野哲平（3）、古屋裕香利（2） 本宮美波（2）	「2020 プロジェクト発表会」



### (3) 2020 年度の取り組みの成果と課題

#### <成果>

- ・ 昨年度の活動から得た知見と新たな課題の解決を通して身に付けたスキルとネットワーク構築力をもって2年目の到達目標である「調査研究で得た知見に基づいて今後の大津の文化財保護行政、観光開発等の在り方についてまとめ、提言する」の一手手前まで来ることができた。
- ・ 当初計画とほぼ同じ年間7回のFW、専門家による8回の講義が実現した。さらにこれらに加え、夏と冬に計2回のプロジェクト独自の発表会やワークショップ、愛媛大学との研究交流が実現できた。コロナ禍にありながら、結果として通常の年よりも充実した取り組みを行えた。
- ・ 単年度学修に積み上げの学修をプラスし、2つの学年の学生たちがこれまでの知見を活かし、新しい発想で活動に共同で取り組むことができ、昨年度よりも重厚な調査・研究ができた。
- ・ オンラインの可能性（正の側面）として学期末の学生のアンケート（プロジェクト独自）からは、遠隔地の大学との交流が実現した、ディスカッションに緊張せず参加できる、画面共有機能などによってむしろ議論しやすい場面があった等の感想が見られた。また、アンケート項目「この授業での成果（どんな力が付いた、どんなことができるようになった 等）」によると、インターネットツールの活用術。画面共有や office の活用、ケースによる利用サービスの選択、言語化や質問することになれる（オンラインのお陰で特にやりやすかった）、オンラインという制限がある中でも自分たちでできることは何か考えた（制限がある中でやりきる力）、ネット上での記事や情報を検索する力、企画力、発表力がついた、対面よりもコミュニケーションをとるのが難しかった分、その力がついたという前向きな回答が見られた。

#### <課題>

- ・ 1年次生と2年次生の受講者数に差が生まれ、年次別の活動計画時には学生数が少ない年次の負担が大きくなるなどプロジェクト運営上の問題が明らかになった。
- ・ 1年生への次年度受講の勧めとして今年度実施した「現場主義入門」における学生のプレゼンとプロジェクトPRの方法、社会共生実習のオープンゼミに相当する「社会共生実習オープンプロジェクト」の開催等による受講希望学生の発掘と勧誘等より多くの学生が社会共生実習に参加できるような仕掛けが必要。
- ・ オンラインの負の側面として、学期末の学生のアンケートからは、グループワークの中でもオンライン上なので対面式よりも熱を持った議論ができなかった、お互いの作業の進捗状況を目視で確認できない、相手の表情などを見て話せないので話し合いに限界があると感じたといったものがあった。



▲【嵯峨美術大教授小畑氏の講演を聞くー盛り上がるディスカッションー】



▲【今年度初のフィールドワークー里坊の町 坂本ー】



▲【観光ガイドの説明を聞くー長浜 大通寺ー】



▲【近江商人豪商の邸宅ー近江八幡ー】



▲【疎水船の試乗ー琵琶湖疎水ー】



◀【学芸員の説明ー大津百町ー】

# 伏見の食材を活かした特産品づくりと地域連携

担当教員：坂本清彦

## (1) 取り組みの趣旨・目的

日本酒、九条ネギ、トウガラシから米、トマトや寒天まで、伏見ゆかりの豊かな農産物や食材を使い、地域の人たちと連携しながら、伏見ならではの「一品」を創り出すことを目指すプロジェクトである。商品開発・プロデュース的な活動を通じて、農林水産業や食と密接に結びついた地域のアイデンティティや活性化のあり方、それに伴うさまざまな課題について学ぶことを狙った。

2年目の今年度は、昨年度の試作品を実際に商品化することを目指したが、新型コロナウイルス感染症拡大により、目的を大きく変更することとなった。議論の結果、伏見ゆかりの豊かな農産物・食材を使った1週間の晩ごはんの献立を考案、その過程も含めて広報、発表し、地域について多くの人に知ってもらうことを目的とした。

## (2) 2020年度の取り組みの紹介

前期の活動は、オンラインでのミーティングが中心となった(図1)。2年生4名、3年生5名(いずれも2年次生)の受講生は、昨年度の取り組みの共有から始め、何らかの形で「商品化」を当面の目的として維持しつつ、その可能性を探った。

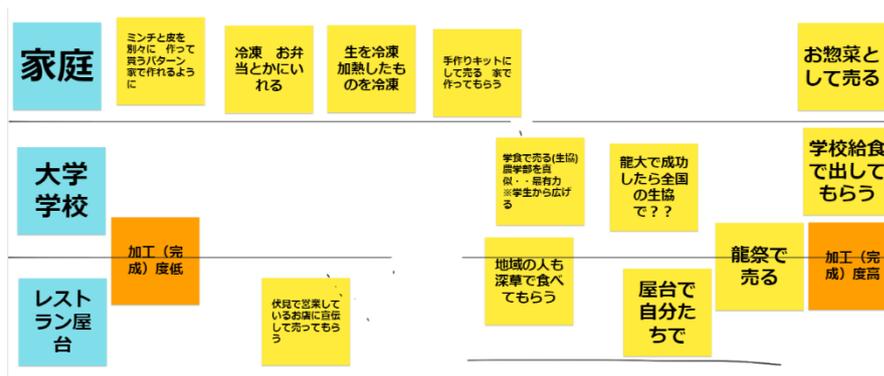


図1 Google Jamboardを使ったオンラインミーティングの記録

1年次生に伏見の農業や食について学んでもらうため、受入れ先の日本食育者協会・食育キッチン石黒の藤掛進氏、伏見区内の農業者樹下ちえ子氏、京都市東部農業振興センター・須浦央氏らにオンラインでお話を伺ったり、商品化方策の一環として、龍谷大学生生活協同組合の谷口一宏氏に大学食堂の運営やメニュー提供の可能性について説明を受けた。

学外活動が許された夏休みには、伏見の納屋町商店街コミュニティキッチンで昨年度の

試作品「小籠包」を調理したり、伏見向島地区の農業者宮本直嗣氏や樹下氏に現場でお話を伺う（図2）などの活動を通じて、受講生同士の関係性を少しずつ築いていった。



図2 樹下ちえ子氏の圃場訪問

後期に入り、新型コロナウイルス感染症と時間という制約下でも達成可能な目標として、上記の「献立考案」と広報を設定し、試作班と広報班を分担して活動を続けることとなった。献立については、これまでに学んだ地域の農産物・食材の知識やスキルを生かしてブレインストーミングなどを行って素案を作り、関係者に意見を伺い10月中に内容を決定した。試作班は12月にかけてほぼ毎週、納屋町商店街コミュニティキッチン及び食育キッチン石黒（図3）、瀬田学舎農学部の食品加工実習室などで献立を実際に試作した。



図3 食育キッチン石黒での試作の様

広報班は、複数の農家や食材を扱う地域のお店などで取材活動を展開する一方、関係者への取材や施策の様子は、随時社会共生実習公式 SNS を通じて広報を続けた。11月には、伏見港公園でのイベントで伏見産の農産物販売をお手伝いし、新たな農業者とのネットワークを広げて取材実施（図4）や食材提供に結びつけるなど、昨年度の実習で不十分だった地域内関係者との連携を進めた。12月には、受講生代表1名と教員が、伏見の地域ラジオ FM845 京都リビングエフエムの番組に出演し、実習の趣旨や活動を紹介した。



図4 トマト農家・中井ファーム取材の様様

これらの活動を経て、1週間の日替わりの晩ごはんを「この7食から伏見を知ろう」と題した献立(図5)にまとめ、試作品とレシピを合わせ、SNSで年明けから発表することとした。写真とレシピはレシピ集にまとめ、また実習と献立の趣旨を説明するためのリーフレットを年末年始にかけて制作した。



図5 試作した献立の一例

1月8日(金)の社会共生実習活動報告会後の日曜日から、7日間にわたり社会共生実習公式 Instagram と Twitter にて献立を発表した。SNSでの公開終了後、レシピ集とリーフレットを印刷して関係各所に送付し、希望者への配布をいらいした。同じ内容の電子版も作成し、社会共生実習の公式 HP にて公開した。

### (3) 2020年度の取り組みの成果と課題

自主的に活動の目標やスケジュールを定め、実行し、目指していた「アウトプット」(献立と SNS などでの広報)を達成できたことは、受講生自身が誇れる成果と考える。特に、新型コロナウイルス感染症拡大のために前期の活動がオンラインに制限され、後述するように多くの課題があった中で、2年次生を中心に昨年度の経験を生かして、時間も考慮しながら実現可能な目標を設定し、実行したことは高く評価したい。昨年度の活動報告

会で投げかけられた、実習が掲げる「地域連携」が果たせたのかという疑問に対し、教員に特に指示されることなく、受講生が地域関係者に積極的に取材調査を行ったことや、受入先（藤掛氏）との意見交換で、受講生自身の目標と考えをぶれることなく臆せずに説明、納得してもらった場面などに、学生の成長を感じた。

地域の多くの方々をつながりをつくり、ラジオ、SNS、大学のCMS（ウェブニュース）など、複数のチャンネルで連携的に広報活動を行ったことで、昨年度より幅広い層に実習について認知してもらえたと考えている。

これらの成果の一方で、食べ物や農業というオンラインでは得難い「生の」経験が意味を持つものを対象とする実習で、前期のオンライン活動は大きな制約となった。1年次生と2年次生の間に、実習の背景知識や対象に対する「感覚」面での大きなギャップがあった。直接目にし、触り、味わうといった「生の」経験を受講生同士で共有できない中で、ギャップをなかなか埋められず、前期は受講生、教員とも、もどかしい時間を過ごした。

また、PBL的な観点からすれば、目的の達成度評価が十分でなかったことは留意しておくべきだろう。地域ゆかりの食材を使った献立を考案し、複数のメディアでPRするという「アウトプット」は達成できたが、「多くの人に伏見について知ってもらおうという」最終的な目的（アウトカム）は、客観的な指標などで把握しきれていないことは、受講生にも認識してもらいたい課題である。

さらに、実習自体の内容やデザインも検討すべきであった。端的に、食品の商品開発を学生による手作りの手法で貫徹することは非常に困難であった。食品加工業者や飲食業者など「プロ」の設備と力をお借りして、受講生は商品企画立案やパッケージングなど「プロデュース」に注力する方が、現実的な商品開発に結びつきやすいだろう（他学部での同様の学生プロジェクトもそのような形で実施されているとのこと）。受入先の藤掛氏は食の商品開発のプロであるが、昨年度予定していた調理・食品加工施設をもつ障がい者福祉施設での試作活動が衛生基準などのために不可能になった。プロの設備と技術を頼れず、地域の小規模なコミュニティキッチンや瀬田キャンパス農学部の調理実習室など、物理的、時間的制約の大きな設備で、素人的な試作しかできなかったことは大きな制約であったし、その解消策を見いだせなかったことは担当教員としての反省点である。

献立考案・公開という一定の成果があげられたことと、食の商品開発の困難さもあり、この実習プロジェクトは今年度で終了し、別の地域で農業や食に関わる新たなプロジェクトを立ち上げることとした。農地としっかりとした食品加工施設を持つ団体が受入先となっていることもあり、伏見での実習の成果と課題を踏まえ、商品開発も含めたさまざまな学びの機会を提供していく予定である。

# いくつになっても、出かけられる！

## ～高齢者を元気にする介護ツアー企画～

担当教員：高松智画

### (1) 取り組みの趣旨・目的

介護が必要な高齢者の生活問題に関する学習やプランニングの基礎的な学習をするとともに、高齢者へのインタビューから、どのようなツアー企画にするかを検討していく。そして、下見やプレゼンテーションでのフィードバックを重ねて、企画内容を練り上げていく。

今年度は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、参加者募集、当日に備えた参加者との面談、ツアーの実施、終了後のふりかえり、ツアー参加者への記念品の贈呈を行うことができなかった。

その代わりとして、実施する予定の企画について、メンバー全員で再度下見を行い、その際に撮影した写真や動画を編集して、インタビューでお世話になった方々に披露する予定である。

このような活動を通じて、本プロジェクトは、どのような配慮や介助があれば、介護が必要な高齢者の「出かける」ことを保障できるのかを考えるとともに、「出かける」ことを妨げている問題・課題は何か検討すること、さらには、コミュニケーション能力やプレゼンテーション能力を身につけることを目的として開講する。

### (2) 2020年度取り組みの紹介

本プロジェクトは当初、通年での開講を予定していたが、新型コロナウイルス感染症対策として前期の全科目がオンラインでの開講となったことを受けて、対象が高齢者であることや対面でなければ困難な場合が多いことから、前期は不開講とした。

#### ① 高齢者の生活問題、ツアーの意義やプランニングの方法に関する学習

まず、買い物難民、引きこもりと孤立死、介護を要する高齢者とその家族が抱える問題から、高齢者が「出かける」ことを妨げている問題状況についての学習を行った。

つぎに、「安全・安心かつ魅力ある観光を高齢者や障害者に提示し積極的に外出する意欲を持って頂くことで生活の質を向上させる」ことを目的とし、バリアフリー調査・評

価、介護旅行の企画・運営等を行っている、「株式会社どこでも介護」の大西氏と橋本氏から、介護旅行の事例や参加者の声などをあげながら、高齢者にとって「出かける」ことの意義や、どのようなプランを作成すればよいかなどについて講義を受けた。

## ② 高齢者へのインタビュー

ツアーの対象となる高齢者とコミュニケーションが図れるようになること、普段の生活の中での困りごとや要望などを聞き取ることで、高齢者への理解を深めること、旅行や外出への要望について聞き取ることを目的として、京都市内のデイケア施設と津市内在住の4名の高齢者にインタビューを行った。

その後、インタビュー内容を全員で共有し、ツアーコンセプト、対象、行先や内容について意見交換を行った。

## ③ ツアーの企画とプレゼンテーション

ここまでの学習と実習をふまえて、まず、受講生6名それぞれがプランを作成して持ち寄り、プレゼンテーションを行った。6通りのプランについて話し合いの結果、行先を滋賀県にするチームと京都市内にするチームの二つに分かれ、さらにプランを練っていくことにした。

## ④ 下見と再プレゼンテーション、ツアー企画の決定

それぞれのチームでプラン内容を検討するにあたっては現地の下見を行い、それをふまえて再プレゼンテーションを行い、大西氏と橋本氏からのアドバイスをふまえながら話し合った結果、行先を滋賀県にするチームの企画を実施することを決定した。

そして、実施にむけて詰めていく必要があること、日程、広報や募集、実施までのタイムスケジュール、役割分担などについて検討を行った（企画書は以下のとおり）。

「大学生と行く！近江八幡 水郷ゆったりツアー」

### ■ ツアーコンセプト

“近江八幡らしさ”を味わうツアー

伝統的な水郷めぐりを中心に近江八幡、そして滋賀県の魅力をゆっくりと堪能する。

### ■ 概要

実施日時：2021年3月24日(水) 10:00~17:00

予算：一人あたり 10,770円

(内訳)移動用バス 70,000円

(内訳)手漕ぎ船2隻 23,600円

(内訳)昼食代 2,970円

募集対象：70歳以上の歩行可能な方(杖・シルバーカー可)

募集人数：4人

## ■ ツアー内容

### ① 新町通り観光・買い物

新町通りは国の重要伝統的建造物保存地域となっており、江戸時代末期から明治にかけて建築された商家が残る町並みは、近江商人のふるさととされている。こうした街並みを楽しみつつ、周辺にある買い物スポット(例：たねや 日牟禮乃舎、クラブハリエ、山上日牟禮など)で自由に買い物をを行う。

### ② 滋賀ならではの食事—お食事処 和でん—

お食事処「和でん」は古民家風の店内で近江牛料理を堪能できるお店。中庭は日本庭園を思わせるつくりになっていて、ゆったりとした時間が過ごせる。

### ③ 近江八幡伝統の手こぎ水郷船

近江八幡和船観光協同組合の水郷めぐりは「豊年橋」を発着する手こぎ舟。「よし地帯」保護のためにあくまでも手こぎ舟にこだわっており、“日本で一番おそい乗物”とも言われる。琵琶湖八景に数えられる景勝地をゆっくりと巡り、のんびりとした時間を過ごせる。

## タイムスケジュール

10：00	大津駅 集合
	近江八幡へ移動
11：00～	新町通り 観光・買い物
12：00～	お食事処「和でん」へ移動
12：15～	昼食
13：30～	水郷船乗り場へ移動
13：45～ 15：05	水郷めぐり貸切船に乗船
15：05～	休憩
	大津駅へ移動
17：00	大津駅 到着・解散

#### ■当日までの工程

- ・ ツアーの下見・再検討
- ・ 案内チラシの作成
- ・ ツアー参加者の募集  
すでに関わりのできている方々（EX. 老人会、高齢者施設）  
大津駅まで自力で来られる方
- ・ ツアー参加者との面談

#### ④ ツアー実施にかわる活動

広報・募集に取り掛かろうとしていたところ、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、京都府、大阪府、兵庫県に緊急事態宣言が発令されたため、その後の実習をどうするかを話し合った。結果として、高齢者が対象であること、対面での募集や面談が困難であることから、ツアーの実施は断念することと決定したが、ツアーが実施できるようさらに準備を進めたいということと、インタビューでお世話になった方々にお礼をしたいという意見をふまえて、その後、下見の実施、募集用のフライヤーの作成、ツアーの疑似体験ができるような動画の作成に取り組んだ。

### (3) 2020年度取り組みの成果と課題

新型コロナウイルス感染症対策によって、11月中旬には入校禁止の措置が取られたり、先述のようにツアー実施を取りやめたりといったことから、当初の予定通りに実習することができなかった。

そのような状況でも、高齢者の身体状況に合わせて移動手段は何を使えばよいか、トイレや食事・買い物の店の設備ではどのようなところを確認しておく必要があるのか、道路や階段での介助にはどのような点に気をつけなければならないかなどについて、企画の検討や下見を通じて学ぶことができた。

また、実習を進めていく中で、大学生であるという立場を生かして、ツアー先でどんな体験をしてもらえば楽しく過ごすことができるかを考え、企画として具体化していくことができたことは大きな成果であった。そして、ツアー実施という一つの目標に向かって協力しあうチームワークについても、学ぶところが大きかったのではないかと考える。



▲「大学生と行く！近江八幡 水郷ゆったりツアー」下見の様子



▲募集用フライヤー

# 多文化共生のコミュニティ・デザイン

## ～定住外国人にとって住みやすい日本になるには？～

担当教員：川中大輔

### (1) 取り組みの趣旨・目的

グローバル化が進展する中、人々の国際的な移動は活発化している。国連経済社会局（DESA）の『国際移民ストック 2019』によれば、2000年に約1億7300万人であった国際移民人口は2019年に2億7200万人に達し、世界人口の3.5%に至っている。日本も例外ではない。法務省出入国在留管理庁の統計によれば2019年の在留外国人数は2,829,416人であり、2012年以降増加し続けている（2012年の在留外国人数は2,033,656人）。日本も既に多くの外国人が定住し、多文化社会となっているのである。

しかし、日本が定住外国人にとって住みやすい社会なのかと言えば、そうではない。「言葉の壁・制度の壁・意識の壁」という3つの壁が立ちはだかつて、生活の様々な場面で苦勞をすることとなる。日本には体系的／包括的な移民政策や多文化共生に関する基本法もなく、定住外国人支援は自治体や地域住民の努力任せになっていると言っても過言ではない。こうした中で、定住外国人の人々が直面している「生きづらさ」から発せられる声に学び、どのような社会変革を成し遂げていくべきかを見いだしていくことが必要とされている。果たして日本社会は「あってはならない違い」をどれほど解消できているのだろうか。「なくてはならない違い」をどれほど保障できているのだろうか。「ちがいを越えた協働」をどれほど実現できているのだろうか。多文化共生という言葉は浸透し、社会的にも多くの人に支持されるものとなっているが、残念ながらその「実」が伴っていない。

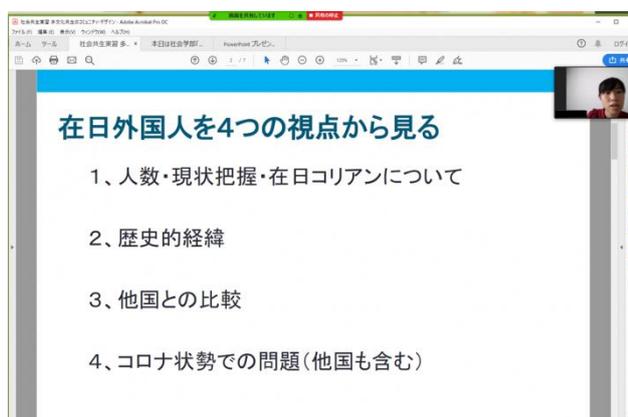
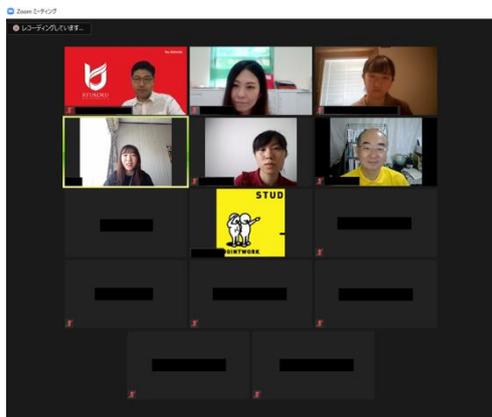
そこで、本プロジェクトでは、「実」の部分で今どのような多文化共生の取組が求められているのか、その一端を明らかとすることを目的とする。具体的には京都の在日コリアンの方々との交わりを中心に、多文化共生まちづくりの課題を見だし、その課題達成のための活動を企画・実践していくこととなる。この過程を通じて、ダイバーシティの向上が、新たな社会をつくりだすチカラの増大につながるための方向性を探究していきたいと考えている。

## (2) 2020年度の取り組みの紹介

COVID-19 パンデミックの影響を受けて、2020年度前期の授業はオンライン実施となった。そのため、文献やインタビューを通じて問題への理解を進めることに力を置くこととなった。具体的にはまず受講生で分担して、日本の多文化化の現況や歴史的な経緯、他国との比較、コロナ禍で生じている問題について調べて、相互に発表しあうこととした。この事前学習の後、在日コリアン二世の呉光現氏（聖公会生野センター総主事）、在日コリアン三世の方と結婚された西嶋優太氏、日本の多文化政策に関する研究をされている鈴木暁子氏（京都府立大学京都地域未来創造センターコーディネーター）、本プロジェクトの受入先担当者でもある在日コリアン二世の南珣賢氏（NPO 法人京都コリアン生活センター・エルファ事務局長）にインタビューをおこなった。



そして、インタビューを通じて得られた情報を整理しながら、日本社会の多文化共生を巡る課題を抽出し、その内から受講生の問題関心に基づく企画テーマを複数に絞り込んでいった。こうした前期活動の中間整理として、2020年8月23日に行われた夏期オープンキャンパスにて報告することとした。



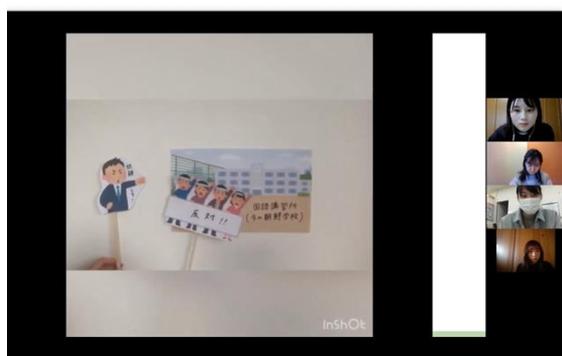
後期授業は対面実施となったことから、感染症対策を行った上で、東九条地域（京都市南

区)のまちあるきや、コミュニティパートナーであるNPO法人都コリアン生活センター・エルファでの活動が取り組まれた。

エルファでの活動にあたっては、前期授業で絞り込んだ企画テーマの中から「アイデンティティの尊重」が選り出されていき、まずは在日コリアン一世の方のライフヒストリーを聴き取ることから始められた。この聴き取り活動と並行する形で、レクリエーション活動にも一緒に取り組むことができ、関係性が耕されていくこととなった。この流れの中で、受講生が発案したアクティビティを提供する機会もいただいた。また、エルファの職員でもある在日コリアン三世の方にもインタビューすることができ、当事者から見える現在の日本社会における問題点についても気づきを得ることとなった。



本プロジェクトでの一連の経験を通じた自らの気づきから受講生は、在日コリアンの人々の歴史や現在直面している課題に若者の多くが関心を寄せられておらず、理解も浅いことを課題とし、聴き取った話を元にした意識啓発動画を制作することとなった。この動画を用いたミニ講演会を本学社会学部「社会イノベーション実践論」の2021年1月12日の授業において実施して、本プロジェクトの成果報告機会とした。この報告を聴いた学生の内、ミックスルーツの背景を持つ受講生からは自身の経験に照らし合わせて、日本社会で生きてきた中で感じられた「生きづらさ」のエピソードが吐露され、共生社会実現のために求められているソーシャルイノベーション実践を考えていく機会にもつながった。



### (3) 2020年度の取り組みの成果と課題

コロナ禍ではあったが、受入先の方々の積極的なご協力により、受講生は当事者と直接に交わる機会に恵まれた。その交わりを通じて、受講生は多文化共生まちづくりの課題を当事者視点から捉えるということを一定程度行えたのではないかと思われる。また、非常に限られた時間ではあったが、受講生は相互に気遣いながらチームワークを発揮し、工夫を凝らした動画を制作することができた。今後活用していきたい。しかし、現場での活動が後期だけとなったことから、課題理解の深さや企画実践の充実度や広がりには課題が見られた。次年度も COVID-19 への対応は求められることとなるが、現場での活動量を増やし、より踏み込んだプロジェクト活動となるように努めたい。

# 発信情報

## WEB

- ① 龍谷大学社会学部「社会共生実習」公式ウェブページ  
URL : <https://www.soc.ryukoku.ac.jp/department/info/training/>

## メディア

- ① 2020(令和2)年12月19日(土) / 読売新聞 (この記事は読売新聞の許諾を得て掲載しています)  
【プロジェクト】いくつになっても、出かけられる！～高齢者を元気にする介護ツアー企画～

---

龍谷大学 社会学部

2020 年度 社会共生実習 活動報告書

---

2021 年 3 月 発行

発行元 龍谷大学 社会学部

住所：〒520-2194 滋賀県大津市瀬田大江町横谷 1 番 5

TEL：077-543-7760 FAX：077-543-7615

E-mail：shakai@ad.ryukoku.ac.jp

URL：https://www.soc.ryukoku.ac.jp/department/info/training/

---



公式 Web サイト



公式 Twitter



公式 Instagram



公式 Facebook

龍谷大学 社会学部 社会共生実習の  
公式 Web サイト・公式 SNS では  
最新の情報を随時更新しています！